平成 28 年度山梨県南都留郡地域教育フォーラム提案書

第 7 分科会
所属：NPO 法人フードバンク山梨
講演者：理事長　米山　けい子

「子どもの貧困を考える」
～今、私たちができること～

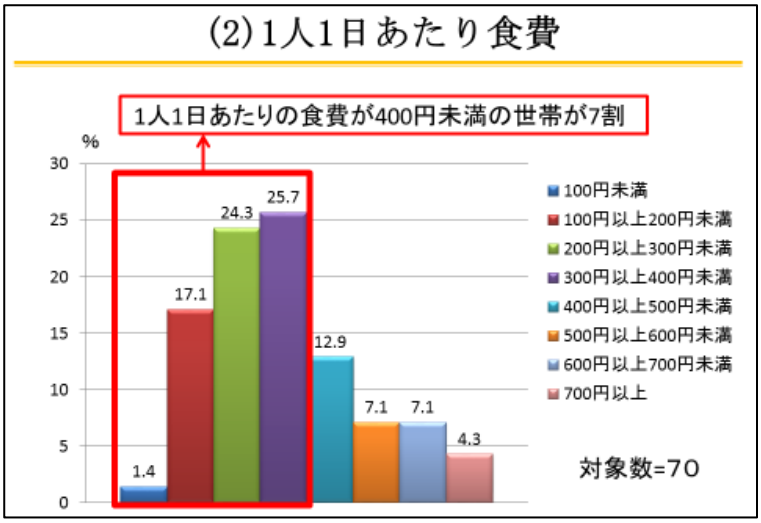
はじめに

今年ユニセフが、子どもの貧困格差を分析し、発表したところ、日本は先進国 41 ヶ国中 34 位で、悪い方から 8 番目でした。「日本は平等で貧富の差がない社会」それを裏切る結果となり日本中に衝撃を与えました。すでに、貧困問題は他国の問題ではなく、日本において解決しなければならない、身近な課題なのです。一方農水省の報告では、まだ食べられるのに廃棄されている食品は年間 642 万トンとされています。これは世界中で飢餓に苦しむ人々に向けた世界の食料援助量 390 万トンを大きく上回る量となります。

フードバンクとはそのようなまだ安全に食べられるのに、箱が壊れたり印字が薄いなどの理由で販売できない食品を寄付してもらい、必要としている貧困世帯や施設、団体に無償で提供する、食品ロス削減と貧困問題を繋ぎ、2 つの課題解決を目指す活動です。これまでに 1356 世帯、総支援人数 2495 人に対して 1 万 6411 回の食料支援を実施しました。

子どもへの支援

2014 年には新潟大学の村山伸子教授と共同で「子どもの食生活調査」を実施しました。その調査で、1 日 1 食を 120 円足らずで暮らす子ども達の厳しい実態が浮き彫りになりました。また、記述の中には「いつもお腹を空かせていた」「これを食べたら朝ごはんがあるのと泣き出す」「流しこむだけの食事」「食事がお通夜のよう」等の声も寄せられ、食べることの楽しさや家族団らんの場である時間は失われていることがわかりました。そのような状況を受け、2015 年には夏休み、冬休みの長期休暇の学校給食がない期間に重点的な食料支援を行なう「フードバンクこども支援プロジェクト」を全国初の試みで実施し、127 世帯 288 人のこどもたちに週 1 回（計 5 回）食品を宅配しました。普通であれば、子どもたちにとって楽しいはずの夏休み、冬休みの長期休暇ですが、困窮する世帯の成長期の子どもにとっては、食べ物にも事欠く生活を余儀なくされ、重点的な支援が必要です。



2016年夏　フードバンクこども支援プロジェクト

２年目になる「フードバンクこども支援プロジェクト」は昨年の1.7倍となる222世帯に、夏休み中５回（毎週１回）総重量８トンにのぼる食料支援を実施することができました。また、学習支援やフードバンクキッチンも新たに実施し、多くの時間の寄付（ボランティア）延べ203人、お金の寄付（延べ280件）、食品の寄付6387.8 kg（約６トン）が寄せられました。

今年は新たに中央市と「子どもの貧困対策連携協定」を結び小中学校８校からの申請を受けつけ、見えない貧困対策の糸口となりました。

スタートイベント
（ボランティアによる箱詰めの様子）

ヴァンフォーレ甲府との連携で
フードドライブを実施しました

協賛、協力をしてくださった
企業・団体の皆様

中央市と連携協定を締結しました

フードバンクキッチンでスイカ割り

学習支援の様子　18名が集まりました

おわりに

私達の支援する子ども達はボロボロの服を着ている訳でもなく、やせ細っているという訳でもありません。中には頂いたブランド物の服を着ている子どもや、米やパン等炭水化物を沢山摂っているため、太っている子どももいます。日本の子どもの貧困はアフリカ等の海外の貧困とは違って見えにくく、外見からもその困窮度は分かりづらいのです。ただ、普通に暮らす子ども達が当たり前に出来ることが困難なのです。例えば、夏休みの給食がない為に十分な食事が摂れなかったり、学校で使う文房具が買えなかったり、楽しみにしている修学旅行に行けなかったり、家族旅行でホテルに泊まる経験が持てなかったりする子ども達なのです。フードバンクこども支援プロジェクトでは、行政や学校と連携することでこれまで見えなかった子どものいる困窮世帯を特定し、地域全体で食料支援を通して、迅速に支援することが可能です。そのためには地域の皆様の協力が必要不可欠です。今のあなたの参加が必要です。共に子ども達の未来を笑顔で満たしていきましょう。